

回想法による人生の浮沈曲線の分析

大久保 孝 治^{*1)}

An Analysis of the Emotional Life Cycle by the Retrospective Method

Takaji OHKUBO

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze the emotional life cycle by the retrospective method. These are the major findings :

1. The emotional life cycle goes up and down between the 0 level (neutral) and the +1 level (good), on the average.
2. The level of a woman's emotional life cycle is higher than a man's, throughout the life span.
3. The emotional life cycle is particularly unstable during adolescence, young adulthood, and middle age.
4. A woman's emotional life cycle is more unstable than a man's.
5. In the teens, success and failure in education strongly control both a man's and woman's emotional life cycle.
6. In the twenties, love, marriage, and children strongly control both a man's and a woman's emotional life cycle.
7. In the thirties, the influence of the family career weakens, relatively speaking, in the case of a woman. On the other hand, in the case of a man, the influence of the work career increases, relatively speaking.
8. In the forties, both men and women look for other possibilities of self-realization outside their work and family.
9. In the fifties, the influence of the family career increases again, relatively speaking.

1 問題の所在

人は人生の途上でそれまでの自分の人生を振り返って「あの頃はよかった」とか「あの

^{*1)} 放送大学助教授 (生活と福祉)

頃は辛かった」とかの感慨をもつことがある。そのとき個人の意識の中で再構成されるライフコースは平坦なものというよりはむしろ起伏に富んだものである。すなわち人生山あり谷あり。そのような形で個人の意識の中に存在する人生の浮沈曲線をデータとして収集し、ライフコース論の視点から分析すること——それが本稿の目的である。

ライフコース論は社会的人間としての人の一生を個人の生活構造（個人と社会の関係のパターン）の変動過程としてとらえる。それは誕生から死亡まで個人の生涯に及ぶ不断の過程である。乳児には乳児の生活構造があり（その中心的要素は母子関係である）、老人には老人の生活構造がある。生活構造の構造的変動（質的変化）は既存の生活構造の中心的要素の消失や新しい要素の出現によって生じる。前者の例としては離婚、家族の死、卒業、定年退職などがあり、後者の例としては結婚、子供の誕生、入学、就職などがある。旧い要素の消失と新しい要素の出現は単独で起こることもあるし、同時にあるいは連続して起こることもある（例：卒業と就職、離婚と再婚）。ライフコースはこうした生活構造の構造的変動を引き起こすさまざまな出来事（ライフイベント）の連鎖である。

ライフコース研究はこうした出来事の分析を通して生活構造の変動過程に作用している規則性や傾向性を探求することを主要なテーマにしている。出来事を分析する場合の指標としては次のようなものがよく使用される。

- ① 経験率（多くの者が経験する出来事か、少数の者が経験する出来事か）
- ② 経験年齢（いつごろ経験する出来事か）
- ③ 経験年齢のばらつき（年連関連的な出来事か否か）
- ④ 他の出来事との順序（一定の規範が存在するか否か）
- ⑤ 他の出来事との間隔（同上）

これらはすべて出来事の客観的側面についての指標であり、ライフコースの輪郭（外観）を把握するために必要なものである。たとえば、われわれが日常よく目にするライフサイクル（人生の標準的な時刻表）のモデルなどはこうした指標を使って構成されたものである。

一方、こうした指標とは別に、出来事経験のもつ主観的意味、主観的效果といったものを測定するための指標が必要である（もしそうした指標の開発を怠るならば、ライフコース研究は皮相なものに陥ってしまうだろう）。

本稿の関心はさまざまな出来事が人生の浮沈曲線に及ぼす効果について測定することにある。念のために述べておくと、人生の浮沈曲線の分析は対象者の「当時の」意識を知るために行なうものではない。もしそれが主たる目的であるならば、回想法は妥当な方法ではない。そうではなくて、人生曲線の分析は対象者の「現在の」意識を知るために行なうものである。対象者がこれまでの自分の人生に対してどのような情緒的な意味付与を行なっているのかを知るためのものである。ライフコースを支配している時間は過去から未来へ向かって一方向的に流れるニュートン的な時間ではない。過去は固定されたものではなく、それは「現在」という浮動する視点から回想という行為によって不断に「生きられている」ものである。その意味で過去はむしろ現在の一部なのであり、現在という瞬間は重層的な時間構造をもつもののだといえる。

2 方法

回想法によって人生の浮沈曲線のデータを収集するしかたには、あらかじめ用意したいくつかの浮沈のパターンを対象者に提示して一番近いものを選んでもらうやり方と、対象者に自由に描いてもらうやり方とがある。統計処理のやりやすさとデータの正確さの点で両者は一長一短だが、今回は中間的な方法を採用した。すなわち年齢軸（10代前期、10代中期……70代中期、70代後期という形で目盛りを付けてある）と浮沈度の軸（+2, +1, 0, -1, -2の5段階の目盛りを付けてある）を直交させたグラフ用紙を対象者に渡して、各年齢時点での浮沈度を線でつなげてもらった。そして浮沈度に変化があった箇所については「変化の原因となった出来事」を記入してもらった。

対象となったのは放送大学で私が担当する面接授業「ライフコース研究」（千葉、埼玉学習センターの計4クラス）の受講生309名。対象の性別・年齢構成は表1に示す通りである。女性の割合が高く、年齢は男女とも40代が一番多い。調査時期は1992年5月。なお、調査票は無記名である。

表1 対象者の性別・年齢構成（309名）

	20代	30代	40代	50代	60代	70代
女性	31	41	92	41	7	2
男性	14	19	34	13	11	4

注。ただし本稿での分析の対象者は60代、70代を除いた285名。

3 分析

(1) 浮沈度の平均値の推移

最初に、各時点での浮沈度の平均値を男女別にみてみよう（図1）。なお、一般のグラフでは男性を実線、女性を点線で表す慣習があるが、ここではサンプル数の多い女性の方を実線で表すことにした。

まず、男女に共通する傾向として2つの点を指摘できる。

① 浮沈曲線は「0」と「+1」の間で上下している。これは人が自分の人生を全体としては肯定的に回想する傾向があることを示すものだろう。

② 浮沈曲線は「0」に近い水準から始まり、20代で最初の上昇があり、しばらくの安定の後に、50代に入って第2の上昇をするが、50代後期には下降する。途中の2つの上昇と最後の下降がいかなる生活構造の変動（出来事経験）と関連するものであるかについては、後でみることにする。

一方、男女による違いについても2つの点を指摘できる。

① 全体を通して女性の方が男性よりも各時点でのポイントが少しずつ高い（20代後

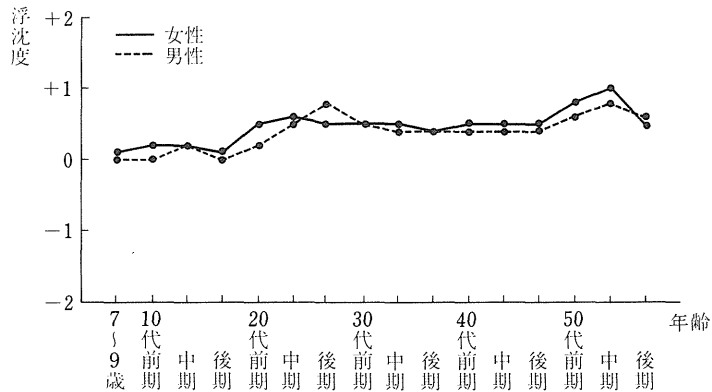


図1 浮沈度の平均値の推移

期は例外)。これには「事実、男の人生の方が辛いのだ」とする解釈と、「いや、たんに男の方が精神的に弱いだけだ」とする別の解釈が成り立つが、どちらがより妥当な解釈であるかの検討はここでは行なわない。

② 第1の上昇(20代の上昇)が、女性は急速だが早く終わる(ピークは20代中期)のに対して、男性は緩慢だが持続する(ピークは20代後期)。この点については、後で上昇の原因となる出来事についてみるときに再び取り上げることにする。

(2) 時点別の浮沈度の分布の割合

平均値は圧縮された測度なので、たとえば同じく平均値「0」であっても、実際に「0」というデータが多いのか、それとも「+2」や「-2」という大きな値が相殺された結果なのかはわからない。そこで、各時点での浮沈度(+2, +1, 0, -1, -2)の分布の割合を男女別にみってみる必要がある(図2, 図3)。

まず、男女に共通する傾向として3つの点を指摘できる。

① 全体を通して「+1」と「0」の占める割合が高い。つまり各時点の浮沈度の平均値が「+1」と「0」の間で上下しているのは、実際に「+1」と「0」という値が多数を占めているためである。

② プラスの領域の占める割合は、ある時期(女性の場合は20代前期、男性の場合は20代後期)まで一貫して増大し、その後は比較的安定(50%台)するが、50代に入って急増する。

③ マイナスの領域の占める割合は、10代(とりわけ後期)で比較的大きく、20代、30代、40代を通じて一定(20%前後)に保たれ、50代で変動(減少と増加)する。

他方、男女による違いとしては2つの点を指摘できる。

① 人生の初期(7～9歳)の浮沈度が、男性では「0」が過半数(57%)を占めているのに対して、女性では「0」は37%を占めるに過ぎない。つまり、男性の多くが子供時代を情緒的にニュートラルなものとして回想しているのに対して、女性の多くはプラス・マイナスいずれかに識別して回想する傾向がある。

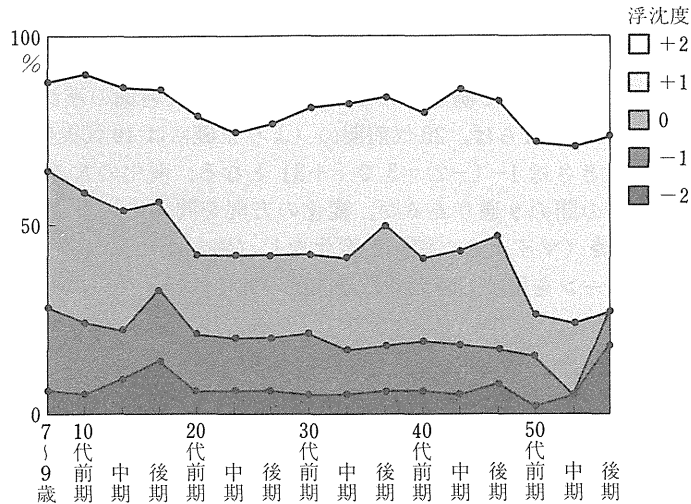


図 2 時点別の浮沈度の分布（女性）

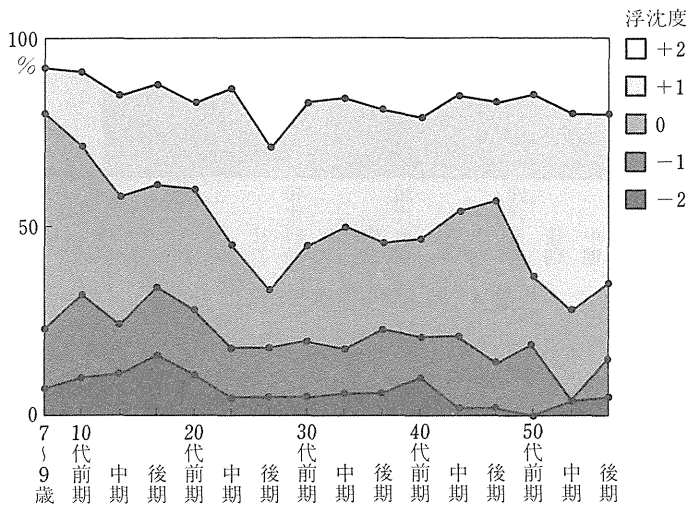


図 3 時点別の浮沈度の分布（男性）

② 全体として各時点の浮沈度の分布状況は女性の方が安定している（凸凹が少ない）。このことはとくにプラスの領域の占める割合についてあてはまる。ただし、このことは個々人の水準において、女性が男性よりも浮沈曲線の変動が緩やかであるということを保ずしも意味するものではない。たとえば、「0」の領域の占める割合が各時点で大きく増減しないという事態は、実際に「0」から他の値への変化やその逆の変化が少ない場合にも生じるし、変化の量は多くとも「0」から他の値への変化とその逆の変化が量的に相殺する場合にも生じるからである。したがって、浮沈曲線の変動を論じるためには、同一のサンプル内での時点間の浮沈度の変化を測定する必要がある。

(3) 時点間の浮沈度の変化

同一サンプル内での時点間の浮沈度の変化は、任意の時点の浮沈度からその1つ前の時点の浮沈度を引くことによって測定される。たとえば20代前期の浮沈度が「+1」で10代後期の浮沈度が「-2」ならば、20代前期の（より正確には10代後期から20代前期へかけての）変化の大きさは $1 - (-2) = 3$ で「+3」となる。変化の大きさを示す値は「+4」から「-4」までの間の9通りあるが、変化の方向を問題にするならば、それは上昇（プラスの値）と下降（マイナスの値）と変化なし（値が「0」）の3通りしかありえない。この3つのパターンを用いて時点間の浮沈度の変化の様子を男女別にみてみよう（図

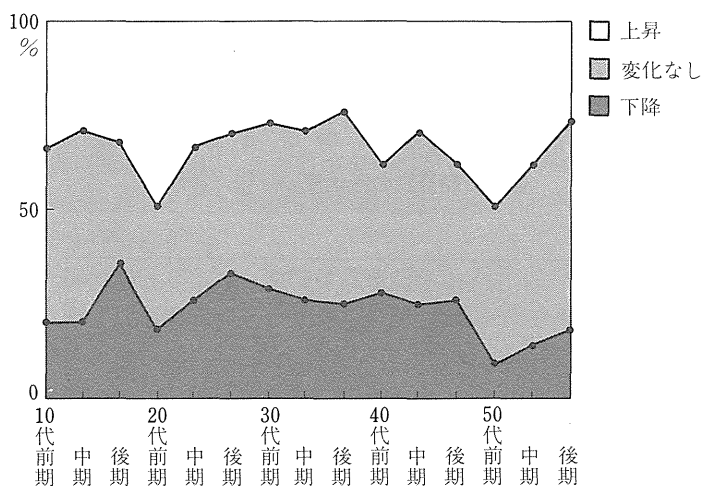


図 4 時点間の浮沈度の変化（女性）

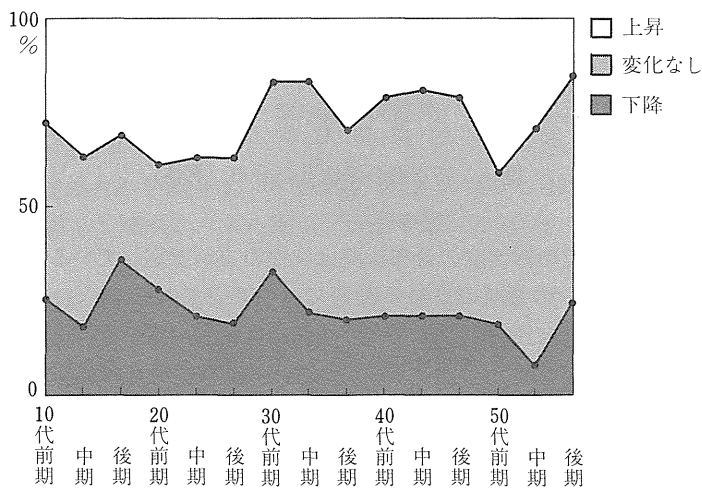


図 5 時点間の浮沈度の変化（男性）

4, 図5).

まず、男女に共通する傾向として次のようなことがいえる。

① 10代後期から20代後期までの時間は上昇・下降を問わず変化を経験しやすい時期(ドイツ・ロマン主義の表現を借りていえば「疾風怒濤の時代」)である。

② 人生の中間地点(女性は40代前期, 男性は30代後期)で一時的な上昇がみられる。

③ 50代前期で一時的な上昇がみられる。

こうした傾向がみられる理由については後で考えるとして、男女による違いについても確認しておこう。

① 女性の方が全体として浮沈曲線の変化率は大きい。さきほど時点ごとの浮沈度の分布状況は女性の方が安定していると述べたが、それは変化そのものが少ないためではなく、上昇的变化と下降的变化の相殺された結果であることがここで明らかになった。

(4) 浮沈の原因となった出来事(経歴の水準)

浮沈曲線の変化は何らかの出来事と関連があるはずである。調査では浮沈曲線に変化が生じた場合に原因となった出来事を記入してくれるよう指示した。その結果、非常にたくさんさんの出来事があがってきた。

ただし、その出来事があまりに多様であるために、始めから個々の出来事の水準に降りてしまうと全体の傾向性を把握することが難しくなる。そこで、まず、出来事を経歴の水準で分類することにする。経歴とは同じ生活領域に属する出来事の連鎖のことである。たとえば、結婚、子供の誕生、親の死といった出来事は家族経歴を構成する出来事である。ここでは家族経歴、教育経歴、職業経歴、友人経歴、健康経歴、戦争経歴という全部で7種類(「その他の経歴」も含めれば8種類)の経歴を設定した。

各時点での浮沈曲線の変化(上昇および下降)の原因となった出来事をその出来事が属する経歴で集計した結果(表2, 表3)から、以下のことがいえる。

① 10代後期までは、浮沈の原因となった出来事に男女差はほとんどない。すなわち、10代前期では教育経歴上の出来事が40%、家族経歴上の出来事が20%弱を占める。10代中期になると、教育経歴上の出来事だけで60%を占めるようになる。10代後期になると、教育経歴上の出来事は40%となり、職業経歴上の出来事が30%前後を占めるようになる。こうした変化は「家族→学校→職場」という個人の加齢に伴う中心的な生活領域の移動を反映したものといえる。

② 20代前期からは、浮沈の原因となった出来事にはっきりした男女差がみられるようになる。すなわち、女性では家族経歴上の出来事が、男性では職業経歴上の出来事がそれぞれ変化の最たる原因となる。ただし、両者の違いは必ずしも対称的であるわけではない。

③ 女性の場合は、早くも20代中期で家族経歴上の出来事が過半数を占めるようになる。その状況がしばらく続いた後、30代中期に入ると家族経歴上の出来事は、相変わらず主たる原因ではあるものの、過半数を割るようになる。しかし、40代後期になって再び過半数を占めるのである(ただし完全な回復ではない)。

表 2 女性の人生の浮沈の原因となった出来事の経歴別割合

	家族	教育	職業	友人	健康	戦争	他	不明	全体
10代前期	19.2	40.8	—	0.8	1.6	2.2	3.2	27.2	100.0(125)
中期	9.9	61.8	3.8	1.5	1.5	2.3	2.3	16.8	100.0(131)
後期	12.6	38.9	25.7	4.2	5.4	1.8	—	11.4	100.0(167)
20代前期	38.6	4.5	27.3	8.5	1.1	1.1	1.7	17.0	100.0(176)
中期	62.3	2.5	11.7	4.9	3.1	0.6	0.6	14.2	100.0(162)
後期	62.2	2.0	14.9	4.7	2.7	—	0.7	12.8	100.0(148)
30代前期	62.8	1.5	8.8	5.1	5.1	—	2.2	14.6	100.0(137)
中期	46.2	6.1	12.3	5.3	4.4	—	0.9	24.6	100.0(114)
後期	45.9	4.7	12.9	1.2	5.9	—	2.4	27.1	100.0(85)
40代前期	42.7	5.8	13.6	8.7	7.8	—	1.0	20.4	100.0(103)
中期	39.1	15.6	12.5	1.6	1.6	—	1.6	28.1	100.0(64)
後期	50.0	6.8	4.5	—	6.8	—	4.5	27.3	100.0(44)
50代前期	52.9	14.7	11.8	5.9	—	—	2.9	11.8	100.0(34)
中期	53.8	15.4	—	—	—	—	7.7	23.1	100.0(13)
後期	77.8	—	11.1	—	—	—	—	11.1	100.9(9)

注. (1) 各時点において変化を経験した人数（カッコ内）を分母にして計算した。

- (2) 20代以降の教育経歴上の出来事は大部分「放送大学入学」という今回の対象者に固有の出来事である。
- (3) 戦争経歴上の出来事は一定年齢以上の対象者に固有の出来事であって、年齢関連的なものではない。
- (4) 変化の原因として複数の出来事があがっていた場合は、原則として先に書かれていたものを優先した。ただし、「父親の死による進学の断念」というように複数の出来事間に明確は因果関係が想定される場合には、より直接的な出来事（この例では「進学断念」）を優先した。

④ 男性の場合は、職業経歴上の出来事が過半数を占めるようになるのは30代中期になってからである。それまでの時期は家族経歴と職業経歴はかなり拮抗した関係にある。このように職業経歴が浮沈の主たる原因としての地位を確立する時期は（女性における家族経歴の場合と比べて）遅いにもかかわらず、その地位はそれほど持続しない。早くも40代中期には職業経歴上の出来事は過半数を割るようになる。

以上のことは、男女のライフコースにおける中心的な経歴の違い、ならびに男女それぞれのライフコースにおける加齢に伴う経歴間のバランスの変化を示すものである。

表 3 男性の人生の浮沈の原因となった出来事の経歴別割合

	家族	教育	職業	友人	健康	戦争	他	不明	全体
10代前期	17.0	43.4	—	—	11.3	7.5	—	20.8	100.0(53)
中期	6.6	60.7	3.3	1.6	4.9	1.6	—	21.3	100.0(61)
後期	5.3	40.0	33.3	1.3	5.3	2.7	—	12.0	100.0(75)
20代前期	11.8	19.7	42.1	5.3	3.9	1.3	—	15.8	100.0(76)
中期	26.7	10.0	38.3	3.3	—	3.3	—	18.3	100.0(60)
後期	45.9	—	39.3	—	—	1.6	—	13.1	100.0(61)
30代前期	37.5	—	32.1	3.6	1.8	1.8	—	23.2	100.0(56)
中期	15.9	4.5	56.8	—	—	—	4.5	18.2	100.0(44)
後期	18.9	2.7	54.1	2.7	5.4	—	5.4	10.8	100.0(37)
40代前期	15.4	10.3	61.5	2.6	—	—	—	10.3	100.0(39)
中期	19.2	7.7	38.5	—	—	—	—	34.6	100.0(26)
後期	20.0	5.0	30.0	—	15.0	—	5.0	25.0	100.0(20)
50代前期	27.8	—	55.6	—	—	—	—	16.7	100.0(18)
中期	35.7	—	35.7	—	—	—	—	28.6	100.0(14)
後期	10.0	—	70.0	—	—	—	—	20.0	100.0(10)

注. 表 2 の場合と同じ。

(5) 浮沈の原因となった出来事（具体的な水準）

では、前節での分析を踏まえた上で、浮沈の原因となった出来事について具体的にみていくことにしよう。

表 4 は浮沈の原因となった具体的な出来事を、年齢別（ただし 10 年区切り）、経歴別（ただし家族経歴、教育経歴、職業経歴以外は「その他」として一括）、作用別（上昇か下降か）に分離して示したものである。性別を加えなかったのは表が煩雑になることを避けたのと、前節の説明を念頭に置いてみてもらえればある程度わかるだろうろうと考えたためであるが、この点については以下の説明の中で補足したい。また、各セルの中での出来事の記載の順序は必ずしも頻度順ではないので（時間的な順序も考慮に入れてある）、この点についても以下の説明の中で言及したい。

① 10 代は教育経歴上の出来事が人生の浮沈に大きくかかわる時期である。中でも進学における成功（希望校への進学）と挫折（不本意な進学、あるいは進学の断念）は最も重要な出来事である。「家族」から「学校」を経由して「市場」へという近代社会における一般的なライフコースのルートにおいて、「学校」は個人の「市場」における位置を定めるための一種の選別装置として機能している。ここでの挫折の経験は個人の意識の中に

表 4 浮沈の厚因となった出来事（主なもの）

		家族	教育・職業	その他
10 代	+	離家（一人暮らし）	希望校への進学 学業順調 クラブ活動 恩師との出会い コンクール等での入賞 希望先への就職	親友との出会い 初恋 健康回復
	-	家族の病気・死 両親の不和・離婚 父親の事業の失敗 自宅の火災	受験の失敗 浪人 転校 中退 登校拒否 いじめ 学業不振 教師・同級生との不和 不本意な進学・就職 上司・同僚との不和	病気 事故 失恋
20 代	+	結婚 子供の誕生 自宅の取得	希望先への就職・転職 仕事順調 昇進 大学再入学	恋愛 趣味 資格取得 健康の回復
	-	家族の病気・死 夫婦の不和 離婚 育児 義父母との同居	不本意な就職・転職 仕事への不適応 転勤 上司・同僚との不和	病気 事故 失恋
30 代	+	結婚 子供の誕生 自宅の取得・新築 子供の成長	仕事順調 昇進 栄転 転職 独立 就職（女性）	恋愛 趣味 健康の回復 余暇時間の増加
	-	家族の病気・死 配偶者との不和 離婚 育児 子供の教育問題 借金 親との同居	仕事への不適応 転職 上司・同僚との不和 事業失敗 昇進の遅れ 出向 昇進（負担増）	病気 事故 失恋
40 代	+	子供の進学・就職 自宅の購入・新築 家計の安定	仕事順調 昇進 転職 就職（女性）	健康の回復 余暇時間の増加
	-	家族の病気・死 夫の単身赴任 夫婦の不和 離婚 育児 子供の教育問題	仕事への不適応 転職 昇進の遅れ 出向	病気 事故
50 代	+	子供の進学・就職 子供の結婚 孫の誕生	昇進 就職（女性）	余暇時間の増加
	-	家族の病気・死 夫婦の不和・離婚	定年退職 再就職 昇進の停止（窓際族）	病気

注．戦争という特定のコーホートに固有の経験，および放送大学入学という今回の対象者に固有の経験は表から除外した。

後々まで残る。われわれはその痕跡を回想された人生の浮沈曲線の中に見い出すのである（一部の人々にとって放送大学入学はそうした過去の挫折経験に対する補償的行為である）。

② 20代は家族経歴上の出来事が人生の浮沈に大きくかかわる時期である。中でも最大のものは生殖家族の形成を意味する結婚と子供の誕生である。この傾向は男女に共通である。「男は仕事、女は家庭」という図式は人生の浮沈曲線の分析を通して見る限り正しくない（少なくとも単純過ぎる）。「女は家庭、男は家庭も仕事も」という図式の方がより現実的である（それが理想的であるかどうかはまた別の問題である）。

③ 30代は、女性の場合、家族経歴上の出来事の影響力が相対的に弱くなる時期である。子供の成長とそれに伴う教育問題が重要な関心事になる反面、それまで育児に消費していた時間を家族以外の領域での活動（再就職、地域活動、趣味など）に向けるようになる。一方、男性の場合、30代は職業経歴上の出来事の影響力が相対的に強くなる時期である。仕事のやりがい、昇進といったことが大きな関心事になってくる。それが望めない場合は、転職というライフコースの方向転換を考えるようになる。このように男女が互いに家族への関心を相対的に弱める結果、夫婦の不和や離婚という出来事も経験されやすくなってくる。

④ 40代は、女性の場合、30代のときと状況にそれほど大きな変化はない。子供の成長に伴う出来事（進学や就職）に一喜一憂しながら、家族以外の領域での自己実現の可能性について模索する（一部の人々にとって放送大学入学はそうした行動の1つである）。一方、男性の場合、40代は職業経歴上の出来事の影響力が相対的に弱くなる時期である。いや、正確には、職業経歴上の出来事が強い影響力を持ち続ける人とそうでない人に分化していくという言い方があたっている。男性の職業経歴において40代は「先が見える」時期である。先が見えてしまった場合、その職場を離れるか（転職）、その職場にとどまりながら仕事以外の領域に関心を移していくかのどちらかをとることになる。

⑤ 50代は（該当するサンプルが少ないのではっきりしたことはいえないが）男女とも家族経歴上の出来事が再び影響力を増してくる時期である。子供たちは経済的に独立し、彼ら自身の生殖家族を形成し始める。子供の卒業、就職、結婚、孫の誕生という一連の出来事（およびそれに伴う儀式）は、本人夫婦の家族経歴における1つの時代の終わりを象徴するものであると同時に、次の時代の幕開けを自覚させるものでもある。

以上の記述は、表4に示された出来事群の中でもとくに年齢関連的な出来事を軸にして行なったものである。したがって、ここで述べられた人生の浮沈曲線の変化のありさまは構造的なものであるという印象を与えるだろう。確かに人生の浮沈曲線は十人十色のように見えて本質的には彼らがその内部で生きているところの社会構造を反映したものなのである。ただし、個々人の浮沈曲線はそうした構造がストレートに顕在化したものではなく、家族の病気や死、本人の病気などに代表される非年齢関連的な出来事（分かりやすいいえば、いつ経験するか予測がつきにくい出来事）が攪乱要因として介在することにより、屈折した形で顕在化したものである。もっともその場合でも、たとえば父親の死が子供の人生に与える影響の中にその社会の構造的特性は反映されているはずである。

4 残された課題

本稿での分析は以上で終わるが、残された課題について2つあげておく。

① 今回の調査のデータからでは出来事が浮沈曲線にもたらす作用の方向（上昇か下降か）はわかったが、大きさは測定できなかった。当初、変化の大きさ（時点間の浮沈度の絶対値）によって測定できるものと考えていたのだが、この考えには盲点があった。それはある出来事によってもたらされた変化の大きさは前の時点の水準に影響される相対的なものであるという点である。つまり、場合によっては、マイナスの意味付与をされた出来事であるにもかかわらず、その前の時点があまりに悪かったため浮沈曲線に相対的な上昇をもたらすことさえあるのである。

② 今回は男女別の分析は行なったが、出生コホート別の分析はサンプル数の関係で行なえなかった。出生コホートを異にする（換言すれば、調査時点での年齢を異にする）対象者を一緒にして分析を行なっているために、世代による浮沈曲線の違いというようなものを検証することはできなかった。また、同じく10代の頃を回想してもらう場合でも、現在20代にある対象者と50代にある対象者では回想の射的距離が違ってくる。当然、そこに存在する出来事の種類や数も違ってくる。そうした違いが浮沈度の認識に及ぼす効果についても検証することはできなかった。

こうした点以外にも問題とすべき点はあると思うが、それらを工夫・改善した調査デザインで次の調査を実施したい。

参考文献

- 森岡清美、青井和夫編『現代日本人のライフコース』、日本学術振興会、1987
正岡寛司他編『ライフコースの形成と転機』、早稲田大学人間総合研究センター、1992
S.B. Merrian and M.C. Clark, 1991, Lifelines: Patterns of Work, Love, and Learning in Adulthood, Jossey-Bass

(平成4年11月16日受理)